慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	超越概念と個：トマス・アクィナスの場合
Sub Title	Transcendental concepts and the individual : the case of Thomas Aquinas
Author	石田, 隆太(Ishida, Ryuta)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2018
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.141 (2018. 3) ,p.1- 28
JaLC DOI	
Abstract	This paper examines Aertsen's view on the transcendentality of the individual (individuum). Western Medieval Thinkers refer to concepts such as the being (ens), the one (unum), the true (verum), and the good (bonum) as transcendentia or transcendental concepts. Many studies have focused on these transcendentia. One of the most important ones is Jan A. Aertsen's Medieval Philosophy and the Transcendentals : The Case of Thomas Aquinas (Brill, 1996). Aquinas enumerates six transcendental concepts—the being, the thing (res), the one, something (aliquid), the true, and the good—in his earlier work, Disputed Questions on Truth (Quaestiones disputatae de veritate). In addition, he says that the many (multitudo) belongs to transcendentia in some places, such as in his most important work, Summa theologiae. According to Aertsen, Aquinas describes the individual in the same terms in which he describes the transcendental one (and something). Furthermore, Aertsen suggests the convertibility of the individual and the being. The first task is to comprehend his argument and examine it critically (Section 1–3). The next task is to confirm Aertsen's view from another point: one that Aertsen does not mention. The point is that transcendental concepts are not restricted to the ten Aristotelian categories (Section 4–5). These tasks enable us to rethink the meaning of the individual in Aquinas's metaphysical thought (Section 6–7).
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000141-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

超越概念と個：トマス・アクィナスの場合

石　田　隆　太*

Transcendental Concepts and the Individual: The Case of Thomas Aquinas

Ryuta Ishida

This paper examines Aertsen's view on the transcendentality of the individual (*individuum*). Western Medieval Thinkers refer to concepts such as the being (*ens*), the one (*unum*), the true (*verum*), and the good (*bonum*) as *transcendentia* or transcendental concepts. Many studies have focused on these *transcendentia*. One of the most important ones is Jan A. Aertsen's *Medieval Philosophy and the Transcendentals: The Case of Thomas Aquinas* (Brill, 1996). Aquinas enumerates six transcendental concepts—the being, the thing (*res*), the one, something (*aliquid*), the true, and the good—in his earlier work, *Disputed Questions on Truth* (*Quaestiones disputatae de veritate*). In addition, he says that the many (*multitudo*) belongs to *transcendentia* in some places, such as in his most important work, *Summa theologiae*. According to Aertsen, Aquinas describes the individual in the same terms in which he describes the transcendental one (and something). Furthermore, Aertsen suggests the convertibility of the individual and the being.

The first task is to comprehend his argument and examine it critically (Section 1–3). The next task is to confirm Aertsen's view from another point: one that Aertsen does not mention. The point is that transcendental concepts are not restricted to the ten Aristotelian

* 日本学術振興会特別研究員 PD ／慶應義塾大学文学部訪問研究員

categories (Section 4–5). These tasks enable us to rethink the meaning of the individual in Aquinas's metaphysical thought (Section 6–7).

一．序

本稿の目的は，トマス・アクィナスの思想を題材として，個という概念を超越概念として捉える可能性を検討することにより，個という概念そのものの理解を主に形而上学的な観点から深めることである．差し当たり，導入として必要なことを簡単に説明しておくことにしよう．

まず超越概念とは主として研究上の用語であり，トマスの言い方をそのまま引用するなら「超越的なものども」（*transcendentia*）となる．その意味するところは，アリストテレスに由来する十のカテゴリーの垣根を超えるものだということである．例えば，アリストテレスに依拠するなら，白いという色は「質」（*qualitas*）に分類され，何かが白いものであると述定することは基本的に質に関する言明でしかない．同様にして，人間や馬は「実体」（*substantia*）に分類され，1メートルという長さは「量」（*quantitas*）に分類される[1]．それに対して，超越概念を認めている多くのスコラ学者たちによれば，例えば超越概念としての「存在するもの」（*ens*）は，実体に属するものに対してであれ，質や量などの附帯性に属するものに対してであれ述定可能である[2]．

次に，トマスが超越概念としてどのようなものを想定しているのかについて簡単に概観しておくことにしよう．『定期討論集　真理について』（*Quaestiones disputatae de veritate*）という初期著作の最初においてトマスは，「真理とは何であるか」（*quid est veritas*）という問題に解答するための予備的な議論において，あらゆる存在するものに随伴する様々な概念を列挙している．すなわち，あらゆる存在するものに随伴する「一般的なあり方」（*modus generalis*）として，トマスは「事物」（*res*），「一」（*unum*），「或るもの」（*aliquid*），「善」（*bonum*），「真」（*verum*）の五つ

を列挙している[3]．他にトマスは，「多さ」（*multitudo*）が超越的なものどもに属していると明言することもある[4]．また研究史においては，「美」（*pulchrum*）がトマスにおいて超越概念であることを主張する研究も存在する[5]．

なお，トマスは超越概念についてそれがどんなものであるかをメタ的に述べることはほとんどないが，超越概念としての「多さ」に関して「何らの類［すなわちカテゴリー］においてもあらず，超越的なものどもに属している」[6]と述べている．この箇所は，先ほど述べた超越概念の意味をトマスが説明している箇所として理解することができる．

本稿では，これら様々な超越概念の中でも「一」と「或るもの」に焦点を当てて，個という概念を超越概念として捉える可能性を検証していく．トマス・アクィナスにおける超越概念に関する先行研究として最も重要なものの一つは，ヤン・アーツェンによる一連の研究である[7]．その中でも，1996年に公刊された『中世哲学と超越的なものども：トマス・アクィナスの場合』（*Medieval Philosophy and the Transcendentals: The Case of Thomas Aquinas*）という著作において，アーツェンは興味深いことを述べている．

> 一が「不分割な」（*indivisum*）存在するものを表示するなら，一性と個体性を結びつけるのは自然なことだと思われる．実際トマスは，超越的な「一」（および或るもの）を記述するのと同じ言葉で，すなわち「それ自体では不分割であり他のものどもからは分割されている」というようにして「個」をまさに記述している．これは，一と存在するものの置換可能性が個と存在するものの置換可能性をも包含しているということを示唆している．［…］この結論は哲学的な観点から興味深いものである．というのも，それは個体性を超越的な述語と見なしているからである[8]．

この示唆ないし解釈は，一や或るものの概念規定を介して，「個」（*individuum*）を超越概念の仲間に入れるものである[9]．20世紀の哲学史家エティエンヌ・ジルソンがかつて美を「忘れられた超越的なもの」（the forgotten transcendental）と言ったことを思い出すなら[10]，個もまた別の忘れられた超越概念であることになるのだろうか．この点についてアーツェンは引用箇所以上のことを特に述べていない．果たしてこの解釈は妥当なものだろうか．このことについて本稿では，最初にアーツェンによるこの示唆を一つの解釈と見なした上で批判的に検討する．次に，アーツェンが検討していない論点によってその示唆そのものの是非を検証する．これらの作業を通じて個という概念に対する理解の深化が得られれば，最終的にはそれが成果となる．

最後に，本稿では必要に応じて（つまりはトマスの語りに応じて）神や天使という存在者を引き合いに出すが，このことについて簡単に弁解しておくことにしたい．神については，人間や馬のみならず神もまた「存在するもの」であると言えることは，トマスに限っても単なる神学上の要請にはとどまらない重要性を持つ．というのも，トマスにおいて哲学的な存在論を理解するためには，一つの看過することができないモデルケースである神についてどう考えるかが重要な契機となるからである[11]．ただそれだけではなくて，神のみならず天使についても語るトマスの姿勢（彼の異名は「天使的博士」（*Doctor Angelicus*）でもあった）は現代ではかなり異様なものに見えてしまうかもしれない．しかしこれに関しても，天使が非質料的であることを述べる中では質料性および物体性という自然学的な概念をトマスは論じている[12]．また，天使の認識能力が人間よりも優れたものであることを述べる中では，「可知的形象」（*species intelligibilis*）という或る種の媒介を想定した哲学的な認識論が論じられている[13]．それゆえ，天使論にも一定の哲学的な意義があることを言い添えておくことにしたい[14]．

二．一，或るもの，個の規定：アーツェンによる議論①

まずはアーツェンの立論を辿っていくことにしよう．彼が基本的に立脚しているのは，トマスがしばしば一とは「不分割な存在するもの」（*ens indivisum*）のことであると言っていることである[15]．先ほど言及した『真理について』では，一は次のように説明されている．

> あらゆる存在するものに絶対的に随伴する否定は不分割であり，一という名はこの不分割を表現している．というのも，一とは不分割な存在するものにほかならないからである[16]．

このようにして一の本質的な規定とされている不分割が個という概念にも含まれているであろうことは，個を意味するラテン語の単語に注目しても（つまり《*in-dividuum*》が既に「不分割なもの」を意味しているので）自然に窺えることである．複数のものに分割されていないという仕方でまとまりを持っているということが一であり，たしかに個にもその側面は含意されている．

さらにトマスは同書で，一とは別に，存在するものという概念に随伴する或るものという概念を説明した上で，一と或るものの規定を対比して説明している．

> ［存在するものの様々なあり方が受け取られる］一つの仕方では，或る一つのものの他のものからの分割に即しており，或るものという名はこうしたことを表現している．というのも，或るもの（*aliquid*）は別の何か（*aliud quid*）として言われているからである．それゆえ，存在するものは，それ自体で不分割である限りにおいて一と言われるのと同様にして，他のものどもから分割されている限りにおいて或るものと言われる[17]．

ここでは，或るものは他のものからの分割を本質的な規定としていることが述べられている．この規定によれば，或る人，或る馬，或る天使（？）が存在すると考える場合には，そうでない人，馬，天使が何らかの観点で想定されていることになる．ただし神について，しかもトマスのように唯一神を認める者にとっては，或る神が存在すると考える場合，そうでない神が存在することは最初から認められていない（はずである）．これは，或るものという概念が神には適用できないことを意味するのだろうか．この点については後で述べることにしよう．一言だけ述べておくなら，この点は神について個という概念がどのような意味で適用されるのかということに関わる．

以上で取りあげた一および或るものの規定を念頭に置いた上でアーツェンは，以下の二つの箇所への参照を註記することで[18]，一および或るものと個が同じ言葉で記述されていると考えている．

> 個は，それ自体では区別されていない（*indistinctum*）のに対して，他のものどもからは区別されている（*distinctum*）[19]．

> 各々のものは，一である限りにおいて，それ自体では不分割であり他のものどもからは区別されている[20]．

ただし厳密に言えば，これらの箇所では「区別されていない」や「区別されている」と言われており，個に関しては分割によってその規定が示されているとは言い難い．さらに，後者の箇所には分割への言及があるが，「各々のもの」（*unumquodque*）という別の要素が入り込んでしまっている．それゆえ，アーツェンのように一および或るものと個が同じ言葉で記述されているということを指摘したいのなら，アーツェンが参照を指示していない別の箇所を見る方がよい．

> 個の理拠（*ratio*）には，それ自体では不分割であり他のものどもからは最終的な分割によって分割されているということが属している[21].

この箇所により，それ自体での不分割と他のものからの分割という二つを個の概念規定として理解することは容易である．しかもこの箇所は，「個の理拠」すなわち個の本質的な規定を説明している箇所でもあるので，個という概念の規定を問題にするなら必ず参照するべきであろう．

同時にこの箇所を参照することによって見えてくるのは，個は一および或るものとは全く同じ言葉で記述されているわけではないということである．なぜなら，他のものからの分割に関して「最終的な分割によって」（*ultima divisione*）という要件が付加されているからである．すなわちトマスの規定によれば，単に他のものから分割されているだけではなくて，それ以上分割できないという仕方で他のものから分割されていると言える時にはじめて個であると言えることになる．したがって，一および或るものと同じ言葉によって個が記述されているというアーツェンの説明には疑問の余地が大いにあることをまずは主張することができる．

さらに言えば，アーツェンのようにもし個が一と全く同じ言葉で規定されていることを認めてしまうと，少なくとも超越概念としての個という概念は消去されることになる．後で見るように，個という語のみならず「個別」や「単数」など個体性の概念を表す語をトマスは複数用いているが，これらの語によって意味される超越的な個体性はすべて超越的な一性のことであると考えることには一定の魅力があるだろう．そうするとトマスは，「個体化」という語も含めてあまりにも豊富な語彙によってずっと同じことを論じていたことになる．しかしながら，このように考えなくてもよい方向性を以下では見出していくことになる．

三．分割，個体化

ここで，次に進む前に，少し立ち止まってトマスがどのような意味で分割を捉えているのかを見ておくことにしよう．手始めに次のテクストを引用する．

> さて，分割には二通りある．一つは質料的な分割であり，それは連続的なものの分割に即して生じるものである．そして量の種である数はこうした分割に随伴する．それゆえ，そのような数は量を持つ質料的な諸事物においてのみ存在する．もう一つは形相的な分割であり，それは相反ないし相異する諸形相によって生じるものである．そして，何らの類［すなわちカテゴリー］においてもあらず，存在するものが一と多によって分割されるということに即して超越的なものどもに属している多さがこうした分割に続く．そしてそのような多さだけが非質料的な諸事物においては存在することがある[22]．

前者の質料的な分割の例としては，1ホールのケーキを8人分に切り分けることを考えればよいだろう．ただしこのような分割によって生じる数は「質料的な諸事物においてのみ存在する」と言われていることから，目下のところ考察している分割のことではない．むしろ次の形相的な分割がまさに考察の対象としている分割のことである．それは，超越概念としての多について言及されていること，およびそのような多が非質料的な諸事物（トマスにとっては主として天使と神のこと）において存在すると言われていることからも窺える．それゆえ，超越概念としての個を考えようとする場合には形相が不分割であるということを理解する必要がある．

形相が不分割であるということは，トマスのテクストではしばしば「形相が個体化される」と表現される．以下はその一例である．

> 基体ないし質料において存在する形相がこのもの［すなわち個体］において

> 存在するということによって個体化されるのと同様にして，［質料から］分離された形相は［他の］或るものにおいて存在するよう本性づけられていないということによって個体化される．というのも，このもの［すなわち個体］における存在と同様に，［他の］或るものにおいて存在しえないことは多数のものについて述定される普遍の共通性を除外するからである[23]．

このテクストは，天使についてそれが個の数だけ種があるというトマスの特異な学説を述べている箇所の中にある[24]．質料と複合されていない（すなわち「分離された」）形相を持つものとしてここで想定されているのが天使である．ここでは，基体に受容される附帯形相（例えば白さ）および質料に受容される実体形相（例えば人間の魂）と，そのような受容を被らない分離された形相という大別すると二種類の形相がいずれも個体化されると言われている．さらに言えば，前者の形相が個体化されるのは，何か個的なものによって受容されることによって（すなわち「このものにおいて存在するということによって」）であると言われている．それに対して，天使が持つ後者の形相が個体化されるのは，他のものにおいて「存在するよう本性づけられていない」ということによってであると言われている．後者の言及を敷衍すれば，最終的な分割によって他のものから分割されているという個の規定がここでも十分に踏まえられている．ここに個の概念に関わる分割と個体化の共通性を窺うことができる．次節ではこの個体化に対するトマスの根本的な考えを見ることになる．

四．個と存在するものの置換可能性：アーツェンによる議論②

アーツェンによる議論を辿る作業に戻ろう．一および或るものと個の規定を重ね合わせた上でアーツェンが示唆していたのは，個と存在するものの置換可能性ということである（「これは，一と存在するものの置換可能性が個と存在するものの置換可能性をも包含しているということを示唆し

ている」)．まずは「置換」の意味を確認しておこう．超越概念同士に関してはトマスのテクストでも，「一は存在するものと置換される」[25]，「善は存在するものと置換される」[26] ということがしばしば言われる．このことの意味についてはトマスによる次の言明が参考になる．

> 真と善は，たしかに基体という点では置換される．なぜなら，あらゆる真なるものは善なるものであり，またあらゆる善なるものは真なるものだからである．しかし，理拠に即しては，真と善は相互に超出している [27]．

この言明から明らかな通り，置換ということで意味されるのは，同一の基体に関して，それが真であれば善であるし，また逆にそれが善であれば真であるということである．すなわち，事物としては同じ外延の中で，ただし異なる本質的な規定の下で超越概念が適用されている時に置換が成り立つと言える．

アーツェンが個と存在するものの置換可能性を示唆するのもこのような意味においてである．こうした示唆が哲学的に興味深い理由として彼は，この示唆が「個体性を超越的な述語と見なしている」という点を挙げている．逆に言えば，個が超越概念であるための要件としてアーツェンは存在するものとの置換可能性を前提としている．本節ではこの点を検証することにしよう．

アーツェンは，個と存在するものの置換可能性を示唆するに際して，次の三つのテクストを参照するよう指示している [28]．

> 各々のものは存在を保持するということに即して一性と個体化を保持する [29]．

> 各々のものは同じものに即して存在と個体化を保持する [30]．

各々のものは同じものに即して一であり存在するものである[31].

いずれのテクストも，同一の基体において「存在」（*esse*）や「一性」（*unitas*）や「個体化」（*individuatio*）が同一の観点から見出されることを述べている．さらに言えば，特に最初のテクストで示されているように，各々の事物における存在の度合いがわかるなら，一性および個体化の度合いもわかるという一般的な原理をここでは想定することができる．アーツェンはこれらのテクストを参照するのみであるが，このような一般的な原理を前提することで，存在するもの，一，個が超越概念として機能することを説明するというのがアーツェンの取る方向性である．

しかしながら，これらのテクストが個と存在するものの置換可能性を主張する根拠となるかについては疑問の余地がある．それは，このテクストにおいて「個体化」という語が使われていることと関わる．上記の三つのテクストにおいて「個体性」ではなくて「個体化」という語が使われているのは，これらのテクストがすべて人間の魂の個体化という議論の中にあるものだからである．少なくともトマスによれば，人間の魂は神から創造されたものであるので，魂が存在し始める時には「個体化」という何らかのプロセスを含んでいる．このことが，上記の二番目のテクスト「各々のものは同じものに即して存在と個体化を保持する」に続く箇所では次のように説明されている．

というのも，諸々の普遍が諸事物の本性において存在を保持するのは，それらが普遍であるようにしてではなくて，ただそれらが個体化されているということに即してだからである．それゆえ，魂の存在は能動的原理としての神から存在し，質料としての身体において存在するが，やはり魂の存在は身体が滅んでも滅びないということと同様にして，魂の個体化も，身体と或る関係を保持しているものの，やはり身体が滅んでも滅びない[32].

ここで注目したいのは，最初に理由が述べられている部分である．そこでは，普遍は個体化されている限りにおいてのみ，「諸事物の本性において」すなわち実在において[33]「存在を保持する」と言われている[34]．敢えて言うなら，任意のものはこの世界において現実に存在するためには必ず個体でなければならないという前提がここでは表明されている．このことに基づくなら，「この世界において現実に存在するもの」はたしかに個と置換されるが，存在するものが個と置換可能であるわけではないと考えることができる．例えば，トマスは質料の規定として「可能態において存在するもの」（*ens in potentia*）ということを理解しているし，また附帯性の規定が「他のものにおいて存在するもの」（*ens in alio*）であることも理解している[35]．すなわち質料や附帯性が「存在するもの」であることは認められている．しかしながら，この世界において現実に存在する質料や附帯性とは，具体的な内実を伴った「この質料」（より正確には太郎の身体）や「この附帯性」（より正確には太郎の持つ肌の一部分の色）のことである．それゆえ，存在するものであるが個ではないものとして質料や附帯性を挙げることができる．しかも個がこの世界において現実に存在するもののことを意味するなら，やはり存在するものと個が置換可能であると考えない方がよいだろう．

個が存在するものと置換できないということについては，次のテクストを傍証にすることもできる．

> 「普遍」と「単数」は存在するものの差異（*differentia*）あるいは自体的な様態（*per se passio*）である[36]．

存在するものが，外延において別々な普遍の集合と単数ないし個の集合に分かれてしまうとしたら，個と存在するものの置換可能性はないと言った方がやはり適切であろう．

五．個という概念のカテゴリーに制約されない適用：アーツェン解釈に対する代案

本節では，アーツェン自身が言及していない論点を取りあげて，個が超越概念であるという主張そのものが成立するかを考えてみることにしよう．そのために有益な論点こそ第一節で取りあげた超越概念の特徴である．すなわちアリストテレス的な十のカテゴリーの垣根を超えているということである．

個という概念が実体や量などのカテゴリーに制約されないで適用されることをトマスは次のように認めている．

> 個（*individuum*）や単数（*singulare*）のように，諸々の実体および附帯性の個に共通である名は全体に対しても諸部分に対しても適用されうる．というのは，相異する仕方に即してではあるものの，諸部分は諸々の附帯性と或る共通点――すなわち，自体的に現存するのではなくて他のものどもに内在するということ――を持っているからである．したがって，ソクラテスおよびプラトンの手は何らかの個ないし何らかの単数のものであると言われうる[37]．

明らかなように，この箇所では個および単数という概念が実体に属するものに対しても附帯性に属するものに対しても適用できることが認められている．このことを出発点として引用文では，実体および附帯性の関係が全体および部分の関係と類似していることに依拠して，個および単数が何らかの全体（ソクラテスやプラトン）のみならず部分（ソクラテスやプラトンの手）に対しても適用できることが認められている．

実のところ以上の点を指摘することだけで個が超越概念であることが言えるというのが本稿の基本的な立場である．それゆえ，この点に関してトマスがどのようなことを言っているのかをもう少し詳しく見てみることにしよう．

個や単数だけではなくて「個別」（*particulare*）という概念も，このように幅広く適用されるものに数えられることもある．

> 「ペルソナ」（*persona*）や「ヒュポスタシス」（*hypostasis*）のように一次的付与の名（*nomen primae impositionis*）――それらは事物そのものを表示する――であろうと，「個」や「担い手」（*suppositum*）などのように二次的付与の名（*nomen secundae impositionis*）――それらは個体性の概念を表示する――であろうと，個体化に関わる諸々の名の内の何らかの名は実体の類にのみ関わる．例えば，諸々の附帯性については言われない「担い手」や「ヒュポスタシス」，また理性的本性における「ペルソナ」，さらにはヒラリウスの理解に即せば「本性の事物」（*res naturae*）もそうである．それに対して，［別の］何らかの名は任意の類における個体化に関わる．例えば，諸々の附帯性においても言われる「個」，「個別」，「単数」がそうである[38]．

この文脈でも「個体化」という語が使われているが，このことはトマスがやはり「事物の中の普遍」を認める論者であることを意味している．「ペルソナ」，「ヒュポスタシス」，「本性の事物」など三位一体論およびキリスト論という神学的な議論で用いられる語が散見されるが，これらはすべて実体の類に属するものに対してしか述定されえない．このこととの対比で，個，個別，単数はそのような制約がないことがここでは示されている．これら三つが概念として全く異なるものを意味しているかどうかは不明である．たしかにトマスは，個体を指示する様々な名を列挙する中で，個という名は「それ自体における不分割」（*indivisum in se*）の側面に関わるのに対して，単数という名は「他のものどもからの分割」（*divisum ab aliis*）の側面に関わるという区別を提示することもある[39]．しかし，この区別をそのまま受け取ってしまうと，個の概念は一に還元され，単数の概念は或るものに還元されることになってしまう．それゆえ，この区別

は個や単数の規定には関わらないとした上で，個，個別，単数は基本的に名の上での相異にすぎないと理解することにしたい．

この引用文においてさらに注目したいのは，個という語が「個体性」（*individualitas*）という概念を表すと言われていることである．しかしその理由を述べる前に，一次的付与や二次的付与について簡単に説明する必要があるだろう．一次的付与および二次的付与の名とはいわゆる「第一志向」（*prima intentio*）および「第二志向」（*secunda intentio*）を表示する名のことである．第一志向の例としては人間という概念が挙げられ，第二志向の例としては類や種という概念が挙げられる．「人間」という一次的付与の名を用いると，人間の概念内容（伝統的なものとしては理性的動物）を介して太郎が人間であることを直接表示できる．それに対して，「種」という二次的付与の名を用いると，太郎に対して言われた人間という概念が種（すなわち類と種差からなるもの）であることを表示できる[40]．このことを踏まえるなら，例えば「ペルソナ」という一次的付与の名を用いると，ペルソナの概念内容（ボエティウスによれば理性的本性の個的実体[41]）を介して太郎がペルソナであることを表示できる．それに対して，「個」という二次的付与の名を用いると，太郎に対して言われたペルソナという概念が個であること（すなわち個体性を持っていること）を表示できるということになる．次の二つのテクストも，このことを説明するものとして引用しておくべきだろう．

> 個は二通りに表示されうる．まずは，「個」ないし「単数」という名のように，第二志向の名によってであり，これは単数の事物ではなくて単数性の概念を表示する．あるいは第一志向の名によってであり，これは，個別性の概念が適合している事物を表示する．そして「ペルソナ」という名によっては後者のようにして個が表示される．というのも，それは個の概念が携わっている事物そのものを表示するからである[42]．

> 「本性の事物」という名は「一次的付与の名であり」，それは個別なものを共通本性との関連によって表示するものである．それに対して，「担い手」という名は「二次的付与の名であり」，それは，個別なものが共通本性において自存する限りにおいては，共通本性に対する個別なものの関わりあいそのものを表示するのに対して，個別なものが共通本性から超出している限りにおいては，個別なものを表示するものである[43]．

ここまでで，二次的付与の名としての個が個体性という概念を表すということはどのような構造の下で言われているのかを説明してきた．最後に，この個体性という概念が何なのかについて改めて考えることが残されている．

六．個体性とは何か

トマスの全著作において個体性という語は二回しか用いられない．一つは前節で引用した箇所である．もう一つの箇所では，個体性という語が「共通化不可能性」（*incommunicabilitas*）の言い換えとして用いられている[44]．まずは次のテクストの参照から始めることにしよう．

> 複合された諸事物においてあるということに即しては，個体化において二つのものを考察することができる．すなわち第一には，個体化の原因――それは質料である――のことであり，こうしたことに即しては，個体化は神に関することごとに対しては転用されない．そして第二にはすなわち，個体化の理拠――それは共通化不可能性の理拠である――のことであり，それはすなわち，或る同一のものが複数のものにおいて分割されず，また複数のものについて述定されもせず，また［そもそも複数のものへと］分割可能ではない限りでのことである．そしてその場合には個体化は神に適合する[45]．

このテクストでトマスは，質料と形相から複合された事物（例えば，身体と魂から複合された人間）において個体化に或る種の二重性が見られることを述べている[46]．すなわち，複合された事物の場合，人間なら人間の形相である魂が質料である身体によって個体化されるということと，抽象的な意味で個体化ないし共通化不可能性があることの二つがある．前者のような個体化は神には見出されないが，後者の意味での個体化は神にも適合すると言われている．この点は次のテクストでも強調されている．

> 「個」が神に適しうるのは，個体化の原理が質料であるということに関してではなくて，ただ「個」が共通化不可能性を含意するということに即してのみである[47]．

それでは，この共通化不可能性は何を意味しているのだろうか．先ほどのテクストでは，主に分割と述定の観点から共通化不可能性が説明されていた．分割に関しては既に第二節および第三節で説明した．「複数のものにおいて分割されない」ということはそれ自体における不分割のことであり，「分割可能ではない」ということは他のものと最終的な分割によって分割されていることだと理解できる．この両方が個であることの規定であると理解すれば，「複数のものについて述定されえない」ということは個であることを述定の観点から言い直しただけであると考えることができる．そのことは次のようなテクストからも窺うことができる．

> 「ヒュポスタシス」という名は個的実体，すなわち複数のものについて述定されえない実体を表示する[48]．

さらにトマスは，共通化不可能ということに基づいて，神のみならず様々なものが多様な仕方で個であることを提示することがある．すなわ

ち，人間においては自分の本性（すなわち形相）が質料によって規定されることで共通化不可能性が存在している一方で，天使においては自分の本性（すなわち形相）がそれ自体で規定されており，他の何ものによっても受容されえないという意味でその本性は十分に共通化不可能である．最終的に，神の存在は「あらゆる付加可能性の否定」（*negatio omnis addibilitatis*）によって規定されているとまで言われている．注目したいのは，その後で『原因論』（*Liber de causis*）という著作からの引用として神の《*individuatio*》が「純粋な善性」（*bonitas pura*）であると言われていることである[49]．トマスが基本的に《*individuatio*》という語を個体化の意味で使っていることはこれまで見てきた通りであるが，「純粋な善性」と述定されている文言をトマスが自分の見解と一致するものとして引用する時，《*individuatio*》は限りなく「個体性」の意味に接近していると言えるのではないか．トマスの頭の中では《*individuatio*》の中に「個体性」の意味が隠れていることもあると考えると，《*individualitas*》という語の出現の少なさを説明できるかもしれない．

それゆえ，個のいわば最も純粋な意味で（つまり極めて抽象度の高い仕方で）神にも個という概念が適用できるとトマスは考えている．第二節で予告したように，神について個という概念がどのように適用されているのかを考えることが重要であることの理由もここにある．要点を先に言うなら，神において個という概念は，自分以外の他の何ものとも何らの観点においても共通点がないということが強調されている．これは主として，最終的な分割によって他のものから分割されているという側面の究極を意味していると言える．この点に関して参考になるトマスの議論を二つ示しておこう．

一つは神の一性に関する議論である．複数の神々が存在することがありえないことを主張するトマスの或る議論を再構成すれば次の通りである．（神の存在は前提とされた上で）それ自体は普遍的なものだと言える神の

本性（あるいは神性）は，実際に存在する神においては個体化されているはずであるが，その場合の個体化は自分とは別のものによって生じるか自分自身によって生じるかのいずれかである．もし自分とは別のものによって神の本性が個体化されるとしたら，複合された事物において形相が質料によって個体化される場合のように，質料（ないし基体）と神の本性が複合されることになってしまう．このような複合は，ほとんどのスコラ学者が認める神の単純性に反するので認められない[50]．次に，もし自分自身によって神の本性が個体化されているなら，そもそも神の本性は自分以外のものと何ら共通性を持っていないことを意味する．というのも，個体化の原理は複数のものにおいて共通ではありえず，さらにこの場合は神の本性そのものが個体化の原理でもあるからである．ところで，神の本性が自分とは別のものによって個体化されるという可能性は否定されたので，神の本性は自分自身によって個体化されているということが認められる．それゆえ，神の本性は自分以外の何ものとも共通性を持っていないので，同じ神性を有する複数の神々が存在することはありえない[51]．

もう一つは，神から天使や人間を経て最下位の事物に至るまで様々なものが個として捉えられることを示す次のような議論である．各々の生成消滅しうる事物（すなわち植物および動物全般）においては，唯一の種の下に数的な区別としての個体化を見出すことができる．次に，太陽のような天体は一つの個体で自らの種全体を体現するという仕方で個体化されている．その上で，非質料的な事物である天使においては，数的な区別のみならず種的な区別としての個体化を最も完全な仕方で見出すことができる．最後に，被造物すべての上位にある神は，何ものともいかなる観点においても合致しないものとして個体化されている．個体化という概念に即したこのような構図が完全性の度合いを示すものとなっている[52]．

そのようなわけで，個という概念は神にも適用されるし，そもそも最下位の被造物から神に至るまで様々な存在者をいわば超越するものとして機

能している．ただし本稿の立場としては，個が超越概念だからそのように機能しているのではなくて，超越概念でもある個という概念そのものが様々な種類の事物に応じて異なる仕方でその共通化不可能性を表していると考えることにしたい．少なくともトマスにおいては，アリストテレス的な十のカテゴリーに制約されないという点を超越概念の本質的な規定として優先的に考慮するべきだからである．

七．結びに代えて

ここで一度，これまでの行論を振り返ることにしよう．本稿では個を超越概念として認めようとするアーツェンの主張を出発点とした．彼の主張を裏づける解釈は，個という概念の本質的な規定が一および或るものの本質的な規定と重なっているということ，および存在するものと個が置換可能であるということの二つを主要な根拠としていた．この二つの根拠に関してはそれぞれ第二節と第四節において批判を行った．第二節では，個の本質的な規定が「それ自体では不分割であり他のものどもからは最終的な分割によって分割されている」ことであることを指摘した．この規定自体はトマスに関わらず一般的に理解可能なものである．それに対して第四節では，個がこの世界において現実に存在するものを意味することを指摘した．このことから，個と存在するものの置換可能性は成立しなくなる．だからといって，個が超越概念である可能性がなくなってしまうわけではない．第五節ではそのことを示すために，十のカテゴリーに制約されないというトマスも認める超越概念の特徴に注目した．この可能性を認めた上で，さらにトマスに依拠するなら，超越概念としての個は個体性の概念という第二志向を表示するものであると言うことも可能になった．

トマスにおいて個という概念を超越概念として認めるなら，この第二志向や第一志向をめぐって，個は第二志向であることが確かであるのに対して，存在するものや善などは第一志向なのか第二志向なのかということを

トマスの超越概念論においてまずは問題化することが可能になる．第六節では，個という名が個体性の概念という第二志向を表示するということをきっかけとして，共通化不可能性という概念を取りあげることでそもそも個体性とは何かという問題に改めて取り組んだ．この問題を考えるモデルケースとして主題的に取りあげたのが神である．神においてはいわば「個体化」が「個体性」そのものとして見出されるというようにして，その個体性がとりわけ他のものからの分割を究極的に推し進めたものであることを意味するということを示唆した．個という概念のみならず，存在や善に関してもトマスは，神を存在そのものと捉えたり[53]善性そのものと捉えたりしている[54]．そのことからすれば，神が個体性そのものであるという考えはトマス解釈としてはそこまで不自然なものではないように見える．しかし，あくまで個体性が第二志向として表示されるものであることに注意するなら，個体性は神において現実に体現されている何らかのものそのものであると考える必要がなくなる．もしそのように考えてしまうと，少なくともトマスにとって，そうした個体性は被造物によって分有されるような何かであることになり，被造物においては個体性が個体化されるという奇妙な事態が生じる可能性も考えられる．

むしろ個体性が第二志向であるということによってトマスが投げかけているのは，目の前に存在している個体をそのありのままに個体として捉えることの不可能性である．たしかにトマスは「事物の中における普遍」説を採用する論者なので，あくまでも個体を普遍との関連でしか捉えていないと評価することはできるかもしれない[55]．反対に，個という概念を第一志向として考えようとすることが個体をまさに個体として捉えることを意味する場合には，個体性は事物の何らかの側面を直接的に意味することになる．このようにして，個が超越概念であるのかという問題を出発点にすることにより，最終的にはそもそも個とは何であるのかという問題を考えることの方がより重要であることが明らかとなった[56]．

注

[1] Aristoteles, *Categoriae*, c. 4. ラテン語の引用はボエティウス訳に基づく：Minio-Paluello 1961, 6, l. 27–7, l. 9.

[2] Cf. 松本 1968, 7–29.

[3] Thomas Aquinas, *De veritate*, q. 1, a. 1, cor.（t. 22.1.2: 5, ll. 124–61）．以下でもトマスの原文としてレオ版を参照する時は，巻数，ページ数，行数のみを記す．

[4] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 30, a. 3, cor.（t. 4: 339b）．註 22 を見よ．

[5] 有名なものとしてはウンベルト・エーコの研究が挙げられる：Eco 1970, 37–68.

[6] 註 22 を見よ．

[7] Aertsen 1998; 1996; 1992; 1991.

[8] Aertsen 1996, 236: When the one signifies “undivided”（*indivisum*）being, it seems natural to connect unity with individuality. In fact Thomas does describe the “individual” in the same terms in which he describes the transcendental “one”（and *aliquid*）：“undivided in itself and divided from others”. This suggests that the convertibility of one and being also comprehends that of the individual and being. […] This conclusion is interesting from a philosophical point of view, for it sees individuality as a transcendental predicate.

[9] 稲垣良典も，一と個が質料的なレベルにおいても精神的なレベルにおいても相応することを主張することで，実質的にはアーツェンの主張と同じことを述べているように思われる．Cf. 稲垣 1980, 18.

[10] Gilson 1960, 159–63. ただしアーツェン自身は，美がトマスの体系において超越概念であると言えるか否かに関して否定的である．Cf. Aertsen 1991.

[11] より正確には，存在するものというよりも「存在」（*esse*）をどう理解するかというトマス研究の最も重要な課題をここでは念頭に置いている．この課題に対して主要な先行研究に対する評価を含む最近の研究としては次のものがある：上枝 2013; Ueeda 2009; 上枝 2006.

[12] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 50, a. 2. Cf. 石田 2016a.

[13] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, qq. 54–58.

[14] Cf. Adler 1982, 97–141; 訳書 155–218.

[15] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 11, a. 1, cor.（t. 4: 107a）．

[16] Thomas Aquinas, *De veritate*, q. 1, a. 1, cor.（t. 22.1.2: 5, ll. 139–42）: … negatio … consequens omne ens absolute est indivisio, et hanc exprimit hoc nomen unum: nihil aliud enim est unum quam ens indivisum.

[17] Thomas Aquinas, *De veritate*, q. 1, a. 1, cor.（t. 22.1.2: 5, ll. 145–50）: Uno modo secundum divisionem unius ab altero et hoc exprimit hoc nomen aliquid: dicitur enim aliquid quasi aliud quid, unde sicut ens dicitur unum in quantum est indivisum in se ita dicitur aliquid in quantum est ab aliis divisum. 訳文における［　］は訳者による補いである.

[18] Aertsen 1996, 236n99.

[19] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 29, a. 4, cor.（t. 4: 333b）: Individuum … est quod est in se indistinctum, ab aliis vero distinctum.

[20] Thomas Aquinas, *Q. de anima*, q. 3, cor.（t. 24.1: 28, ll. 316–18）: Vnumquodque … in quantum est unum, est in se indiuisum et ab aliis distinctum.

[21] Thomas Aquinas, *Super De Trinitate*, q. 4, a. 2, ad 3（t. 50: 125, ll. 258–60）: … de ratione indiuidui est quod sit in se indiuisum et ab aliis ultima diuisione diuisum.

[22] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 30, a. 3, cor.（t. 4: 339ab）: Est autem duplex divisio. Una materialis, quae fit secundum divisionem continui: et hanc consequitur numerus qui est species quantitatis. Unde talis numerus non est nisi in rebus materialibus habentibus quantitatem. Alia est divisio formalis, quae fit per oppositas vel diversas formas: et hanc divisionem sequitur multitudo quae non est in aliquo genere, sed est de transcendentibus, secundum quod ens dividitur per unum et multa. Et talem multitudinem solam contingit esse in rebus immaterialibus.

[23] Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, ad 4（t. 24.2: 83, ll. 350–56）: … sicut forma, que est in subiecto uel materia, indiuiduatur per hoc quod est in hoc, ita forma separata indiuiduatur per hoc quod non est nata in aliquo esse: sicut enim esse in hoc excludit communitatem uniuersalis, quod predicatur de multis, ita non posse esse in aliquo.

[24] Cf. 石田 2017a, 35–38. 全く別の文脈ではあるが，トマスのこの学説は生物学の哲学において種タクソンが個体であることを主張する説と形式上は類似している．生物学の哲学に関しては主に次の諸研究を参照した：田中 2015, 66–71; 植原 2013, 73–114.

[25] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 11, a. 1, cor.（t. 4: 107a）.

[26] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 16, a. 3, cor.（t. 4: 210a）.

[27] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* II-II, q. 109, a. 2, ad 1（t. 9: 417b）: … verum et bonum subiecto quidem convertuntur: quia omne verum est bonum, et omne bonum est verum. Sed secundum rationem, invicem se excedunt …

[28] Aertsen 1996, 236n100. なお，以下で取りあげるテクストに関しては別の観点から考察したことがある：石田 2017b, 25–26; 2016b, 159.

[29] Thomas Aquinas, *De 108 articulis*, 108（t. 42: 294, ll. 1185–87）: … unumquodque … secundum quod habet esse, habet unitatem et indiuiduationem.

[30] Thomas Aquinas, *Q. de anima*, q. 1, ad 2（t. 24.1: 10, ll. 350–51）: … unumquodque secundum idem habet esse et indiuiduationem.

[31] Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 9, ad 3（t. 24.2: 96, ll. 355–56）: … unumquodque secundum idem est unum et ens …

[32] Thomas Aquinas, *Q. de anima*, a. 1, ad 2（t. 24.1: 10–11, ll. 352–59）: Vniuersalia enim non habent esse in rerum natura ut uniuersalia sunt, set solum secundum quod sunt indiuiduata. Sicut ergo esse anime est a Deo sicut a principio actiuo, et est in corpore sicut in materia, nec tamen esse anime perit pereunte corpore, ita etiam indiuiduatio anime, etsi aliquam relationem habeat ad corpus, non tamen perit corpore pereunte.

[33]《*in rerum natura*》がいくつかの現代語訳で次のように訳されていることを参考にした：「実在の世界において」（藤本 2006, 96）；《en lo real》（Téllez 1999, 12）；《in reality》（Rowan 1949, 11）.

[34] いわゆる「事物の中の普遍」のことである．Cf. 山内 2008, 19–114; Armstrong 1989, 77, 99. アームストロング著の訳者である秋葉剛史は「内属的普遍者」という語を補っている（訳書 175 頁）.

[35] Thomas Aquinas, *Contra Gentiles* I, c. 65（t. 13: 179a, ll. 33–34）.

[36] Thomas Aquinas, *Contra Gentiles* I, c. 65（t. 13: 179a, ll. 40–41）: … *universale* et *singulare* sunt differentiae, vel per se passiones entis.

[37] Thomas Aquinas, *Compendium theologiae* I, c. 211（t. 42: 163, ll. 10–18）: Ea … nomina que sunt communia indiuiduis substantiarum et accidentium, ut indiuiduum et singulare, possunt et toti et partibus aptari; nam partes aliquid cum accidentibus habent commune, scilicet quod non per se existunt sed aliis insunt, licet secundum modum diuersum. Potest igitur dici quod manus Sortis et Platonis est quoddam indiuiduum uel quoddam singulare …

[38] Thomas Aquinas, *De unione Verbi*, a. 2, cor.（Senner et al. 2011, 54）: … nominum ad individuationem pertinentium — sive sint nomina primae impositionis, sicut „persona“ et „hypostasis“, quae significant res ipsas, sive sint nomina secundae impositionis, sicut „individuum“, „suppositum“ et huiusmodi, quae significant intentionem individualitatis — quaedam eorum pertinent ad solum genus substantiae, sicut „suppositum“ et „hypostasis“, quae de accidentibus non dicuntur, et „persona“ in rationali natura, et etiam „res naturae“ secundum accpetionem Hilarii; quaedam vero pertinent ad individuationem in quocumque genere, sicut „individuum“, „particulare“ et „singulare“, quae etiam in accidentibus dicuntur.

[39] Thomas Aquinas, *Super Sent.* III, d. 6, q. 1, a. 1, qc. 1, cor.（Moos 1933, 225, n. 22）.

[40] Cf. 山内 2008, 156–65; Schmidt 1966, 123–24n90. なお，第一志向および第二志向という術語においては《*intentio*》を「志向」と訳し，それ以外の場合は「概念」と訳している．

[41] Boethius, *Contra Eutychen et Nestorium*, c. 3.

[42] Thomas Aquinas, *Super Sent.* I, d. 23, q. 1, a. 3, cor.（Mandonnet 1929, vol. 1: 563）: … individuum dupliciter potest significari vel per nomen secundæ intentionis, sicut hoc nomen « individuum » vel « singulare », quod non significat rem singularem, sed intentionem singularitatis; vel per nomen primæ intentionis, quod significat rem, cui convenit intentio particularitatis; et ita significatur hoc nomine, « persona »; significat enim rem ipsam, cui accedit intentio individui.

[43] Thomas Aquinas, *Super Sent.* III, d. 6, q. 1, a. 1, qc. 1, cor.（Moos 1933, 225, n. 21）: Hoc … nomen, *res naturæ*, *est nomen primæ impositionis*, significans particulare per respectum ad naturam communem. Hoc vero nomen, *suppositum*, *est nomen secundæ impositionis*, significans ipsam habitudinem particularis ad naturam communem, inquantum subsistit in ea; particulare vero, inquantum exceditur ab ea.

[44] Thomas Aquinas, *De potentia*, q. 9, a. 6, cor.（Bazzi et al. 1965, 239b）.

[45] Thomas Aquinas, *Super Sent.* I, d. 25, q. 1, a. 1, ad 6（Mandonnet 1929, vol. 1: 604–5）: … in individuatione, secundum quod est in rebus compositis, est duo considerare: primum scilicet, individuationis causam quæ est materia, et secundum hoc in divina non transfertur; et secundum, scilicet rationem individuationis quæ est ratio incommunicabilitatis, prout scilicet aliquid unum

et idem in pluribus non dividitur, nec de pluribus prædicatur, nec divisibile est, et sic convenit Deo …

[46] この二重性について詳しくは次を見よ：石田 2018; 加藤 1985, 137–39.

[47] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 29, a. 3, ad 4（t. 4: 332b）: *Individuum* … Deo competere non potest quantum ad hoc quod individuationis principium est materia: sed solum secundum quod importat incommunicabilitatem.

[48] Thomas Aquinas, *De potentia*, q. 8, a. 3, cor.（Bazzi et al. 1965, 220a）: … hoc nomen *hypostasis* significat substantiam individuam, id est quae non potest de pluribus praedicari.

[49] Thomas Aquinas, *Super Sent.* II, d. 3, q. 1, a. 2, cor.（Mandonnet 1929, vol. 2: 90–91）.

[50] Cf. Adams 1987, 903–60.

[51] Thomas Aquinas, *Contra Gentiles* I, c. 42（t. 13: 119b, ll. 28–34）. この箇所は別稿でも取りあげた：石田 2017b, 23–24.

[52] Thomas Aquinas, *De spiritualibus creaturis*, a. 8, cor.（t. 24.2: 82–83, ll. 275–315）. この箇所は別稿でも取りあげた：石田 2017a, 36–37.

[53] Thomas Aquinas, *Summa theologiae* I, q. 4, a. 2, cor.（t. 4: 52a）etc.

[54] Thomas Aquinas, *Contra Gentiles* I, c. 38（t. 13: 113a, l. 6）etc.

[55] トマスが普遍的なものを個体的なものよりも評価しているという点で個をめぐる哲学史を叙述する哲学史家としてはハインツ・ハイムゼートの名を挙げることができる：Heimsoeth 1987, 178–81; 訳書 295–99. ただし，このような整理が妥当なものであるかは検討の余地があるだろう.

[56] 本稿は，2017 年 10 月 28 日（土）に慶應義塾大学で開催された 2017 年度 MIPS（三田哲学会哲学・倫理学部門）例会での発表原稿に修正を加えたものである．発表原稿の作成にあたっては，内山真莉子，小山田圭一，本間裕之（五十音順，敬称略）から様々な指摘や助言を得た．そして例会当日も参加者から様々なコメントを頂戴した．記して感謝したい．また，本稿は JSPS 科研費 17J00136 の助成を受けたものである.

文献

Adams, M. Mc. 1987. *William Ockham*. Vol. 2. Notre Dame: University of Notre Dame Press.

Adler, M. J. 1982. *The Angels and Us*. New York: Collier Books.

日本語訳：アドラー，モーティマー・J．1997.『天使とわれら』，稲垣良典＝訳．講談社.

Aertsen, J. 1998. “The Philosophical Importance of the Doctrine of the Transcendentals in Thomas Aquinas.” *Revue International de Philosophie* 52, 204（2）：249–68.

————. 1996. *Medieval Philosophy and the Transcendentals: The Case of Thomas Aquinas*. Leiden: Brill.

————. 1992. “Truth as Transcendental in Thomas Aquinas.” *Topoi* 11（2）：159–71.

————. 1991. “Beauty in the Middle Ages: A Forgotten Transcendental?” *Medieval Philosophy and Theology* 1: 68–97.

Armstrong, D. M. 1989. *Universals: An Opinionated Introduction*. Boulder: Westview Press.

日本語訳：アームストロング，デイヴィッド・M．2013.『現代普遍論争入門』，秋葉剛史＝訳．春秋社.

Bazzi, P. ed. 1965. *Quaestiones disputatae*. 10 ed. Vol. 2. Torino: Marietti.

Eco, U. 1970. *Il problema estetico in Tommaso d'Aquino*. Milano: Bompiani.

Gilson, É. 1960. *Elements of Christian Philosophy*. New York: Doubleday & Company.

Heimsoeth, H. 1987. *Die sechs grossen Themen der abendländischen Metaphysik und der Ausgang des Mittelalters*. 8 ed. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgemeinschaft.

日本語訳：ハイムゼート，ハインツ．1995.『近代哲学の精神　西洋形而上学の六つの大テーマと中世の終わり』，座小田豊，後藤嘉也，須田朗，宮武昭，本間謙二＝訳．法政大学出版局.

Mandonnet, P. ed. 1929. *Scriptum super libros Sententiarum Magstri Petri Lombardi Episcopi Parisiensis*. Editio nova. Vol. 1–2. Paris: P. Lethielleux.

Minio-Paluello, L. ed. 1961. *Aristoteles Latinus* I. 1–5. Bruges: Desclée de Brouwer.

Moos, M. F. ed. 1933. *Scriptum super Sententiis Magstri Petri Lombardi*. Vol. 3. Paris: P. Lethielleux.

Rowan, J. P. tr. 1949. *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas'* De Anima. St. Louis: B. Herder Book.

Schmidt, R. W. 1966. *The Domain of Logic according to Saint Thomas Aquinas*. The Hague: Martinus Nijhoff.

Senner et al. ed. 2011. *Quaestio disputata »De unione Verbi incarnati«*（*»Über die*

Union des fleischgewordenen Wortes«). Stuttgart-Bad Cannstatt: frommann-holzboog.

Téllez, E. tr. 1999. *Cuestiones disputadas sobre el alma*. Pamplona: Ediciones Universidad de Navarra.

Ueeda, Y. 2009. "Thomas Aquinas, Being and Actuality." Pp. 245–59 in *The Word in Medieval Logic, Theology and Psychology*, ed. T. Shimizu, et Ch. Burnett. Turnhout: Brepols.

石田隆太．2018.「個体化の原理に潜む二つの側面：トマス・アクィナスによる個体化理論の基礎」.『哲学・思想論叢』36（近刊）.

————．2017a.「トマス・アクィナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって」.『中世思想研究』59: 31–45.

————．2017b.「トマス・アクィナスによる個の論理——神が個であることの意味をめぐって」.『哲学・思想論叢』35: 18–30.

————．2016a.「質料概念と天使の非質料性——トマス・アクィナスによる天使論の一側面」.『中世哲学研究』35: 22–40.

————．2016b.「《individuatio》と《principium individuationis》の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の一側面」.『哲学』（日本哲学会）67: 153–68.

稲垣良典．1980.「unum quod convertitur cum ente について」.『哲学年報』（九州大学文学部）39: 1–25.

上枝美典．2013.「現実性としてのエッセ再考」.『アルケー　関西哲学会年報』21: 37–48.

————．2006.「神・存在・現実——トマス・アクィナスのエッセ解釈の試み」.『アルケー　関西哲学会年報』14: 141–56.

植原亮．2013.『実在論と知識の自然化　自然種の一般理論とその応用』．勁草書房.

加藤雅人．1985.「トマスにおける「個」の意味」.『中世思想研究』27: 133–41.

田中泉吏．2015.「生物学的個体化——有機体と種のケース」.『哲学』（三田哲学会）134: 55–77.

藤本温．2006.「トマス・アクィナス『定期討論集　魂について　第一問題』翻訳　人間の魂は「形相」でありかつ「この或るもの」でありうるか」．山口義久＝研究代表者，『プラトン主義の受容と変容を通じての古典の普遍性の研究』所収（87–104 頁）．科学研究費補助金研究成果報告書.

松本正夫．1968.『「存在の論理学」研究』．第 2 版．岩波書店.

山内志朗．2008.『普遍論争　近代の源流としての』．平凡社.